転生前のチュートリアルで異世界最強になりました。8
準備し過ぎて第二の人生はイージーモードです！

ALPHA LIGHT

小川悟
Ogawa Satoru

アルファライト文庫

CONTENTS

第一章　研修施設と土地神 —— 007
第二章　新たなる旅立ち —— 097

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.


バルドー
ドロテアの元冒険者仲間。
しっかりしているが、
キケンな趣味を持っている。
ドロテア
国内では知らぬ者が
いない英雄。
トラブル体質なことを
反省中だが……？
シル
テンマの従魔である、
シルバーウルフの子供。
食いしん坊＆甘えん坊。
ピピ
兎獣人の少女。
活発な性格で、
研修にもとても前向き。
テンマ
33歳で命を落とし、
異世界に転生することになった元ゲーマー。
ゲームの知識でこの世界を楽しみ尽くす。
ジジ
人族の少女。
泣き虫で不器用だが
頑張り屋。
フリージア
バルドーの母。
神格を与えられて、
土地神になった。
リディア
森の奥深くに住む冒険者。
その正体は……？
ミーシャ
冒険者に憧れ、
『開拓村』を出た狐耳少女。
研修に対して
かなりストイック。
登場人物紹介

第一章

研修施設と土地神

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.

第1話　今後の予定

ようやく、落ち着いた……と言って良いのか？

俺――テンマは王都に来てから、ようやく穏やかに数日を過ごせていた。

王都に来てからというもの、ゆくゆくは研修施設にしようと『呪いの館』なる物を浄化したり、王家と元老院の権力争いに巻き込まれたりと、ずっと大変だった。

だが、先日行われた元老院会議にて元老院がボロを出したこと。

俺が仮面にカツラ、マントを身に纏い、『テックス仮面』（ちなみにテックスは俺が前世の知識を広めたり、チートな能力を使って作業したりするときに名乗る偽名だ）として正体がバレないように、元老院に雇われていた非合法な組織・闇ギルドの輩を粛清したこと。

さらには元々王宮に諜報員として勤めていて、今では俺の仲間であるバルドーさんが、元老院のバックについていたデンセット公爵をお仕置きしたことで一旦問題は片付いたんだよな。

……まあ、テックス仮面の姿がこの世界で恐れられている伝承上の存在『悪魔王』と瓜二つだということで、色々な人に怖がられてしまったわけだが。

いや、あれはもう封印するんだから問題ないはずだ。

それにしても、また忙しくなったら嫌だなぁ。

何せ今俺は、バルドーさんに念話で呼び出されて、彼の部屋へと向かっている最中だ。

元老院の一件について、バルドーさんが王宮と調整を進めているので、きっとその報告だろう。

ちなみにここは空間を複製出来る魔術――ディメンションエリアを用いて生成した、どこでも研修施設――『D研』内に建てた『どこでも自宅』の中。

秘密の話をするにはうってつけな場所である。

ただ、こうしてバルドーさんに呼び出されたときに良い話を聞いた覚えはあまりない。

……っていうか俺、暇になるときなんて来るのかな。異世界に来てから、いや来る前から、ずっとバタバタだった気がするんだけど。

そう、三十三歳のときに日本で命を落とした俺は、十四歳の少年として異世界へと転生した。

だが、転生後にすぐさま死んでしまわないように、三ヶ月の研修を受けることになる。

しかし、それが終わったのはまさかの十五年後。
なんとそれは俺の研修を管理していた女神のミスが原因だった。
……けど、その十五年も無駄とは言えない。
その間、前世のゲームで得た知識を活かして効率よく訓練して、ステータスがチートな数値になったのだから。
それからただ気ままに過ごすつもりだったが、多くの仲間が出来た。
狐獣人の美少女・ミーシャや、人間族と兎獣人のハーフの姉妹であるジジとピピ。英雄と呼ばれるほどの腕を持つ魔術師なのに、トラブルを引き込むドロテアさん。そしてその姪孫でありロンダの領主・アルベルトさんの娘のアーリン（王都に発つタイミングで別行動になったが）。そしてバルドーさん、俺の研修の設定をミスったことで神格を剥奪され、この世界に送られて俺の眷属となった女神のアンナ。
……なんだかイロモノ集団とすら言えてしまいそうなメンバーではあるが、まぁ、大切な存在ではある。
それ以外にも日を追うごとに異世界で人脈が広がっている感覚はあるが、反面、面倒なことも増えたなと思う今日この頃だ。

さて、そんなことを考えているうちにバルドーさんの部屋に着いた。

ノックをして中に入り、バルドーさんの向かいに腰を下ろす。
すると彼は、先日の元老院との一件がどう進んでいるのかを報告してくれた。
とりあえず悪魔王については、元老院の不正を正しに現れたと王宮が正式に発表した。
その上で元老院議長のベルント侯爵が不正の元凶であり、闇ギルドを利用していたとも明らかにしたんだとか。
まあデンセット公爵のお仕置きはバルドーさんが秘密裏に行ったわけだし、妥当な落としどころだよね。
ちなみにデンセット公爵はバルドーさんの実の弟で、彼の母親を殺した人間でもある。
さて、そういった発表を受けての王都の住民の反応はと言えば……元より王都では闇ギルドの拠点が悪魔王に潰されたという噂が広まっていたので、住民はあっさり納得したんだとか。
むしろ『悪事を働くと、悪魔王に苛烈な制裁をくだされる』という噂を王家主導で意図的に流すことにより、王都の治安は劇的に良くなった。
「いやぁ～、悪魔王が正義の味方みたいになっていて、なんか照れくさいね～」
なんだか褒められているみたいで、頬が緩んでしまう。
「ですが王都の残りの問題を解決しないと、また悪い噂になってしまいますよ」
いやいや、それは俺の仕事じゃないから。

「まずは闇ギルドの呪いの浄化をお願いします」
……くっ、それはやらないとダメなやつだ。
そう、人間の負の感情が吹き溜まりになった場所では、呪いが育ってしまう。
闇ギルドの拠点には囚われていた人間が何人もいて、良い扱いを受けていなかったが故に呪われてしまっているんだよな。
「わ、分かりました……」
「それと、拠点を造っていただかないと」
「そ、それは……後回しで良いんじゃないかなぁ」
当面の拠点として、呪いの館があった一角に小屋を建て、そこにD研の入り口を設置してはいるものの……完全に手抜き状態だ。
でも忙しかったし……。
「そうですか……。分かりました、それで構いません！」
おお、なんかバルドーさんが優しくなった！
「ですが、そうなるとD研を利用させなくては立ち行かなくなっていきますよねぇ。研修施設が稼働し始めたらエクレアさんのところには王宮関係者が出入りするようになりますし……あっ、そろそろネフェルさんも来るので、冒険者ギルドの関係者も受け入れられるようにしなければならないんじゃありませんか？」

エクレアさんはドロテアさんの一番弟子で、その優秀さを元老院に疎まれて王宮を追放された。それに伴って他の宮廷魔術師も辞めることになり……研修施設に受け入れることになった。
そしてネフェルさんは、冒険者ギルドの受付の職員を束ねている女性だ。研修を受けに来る冒険者の対応や、冒険者ギルドとの調整をしてもらうために雇うつもりである。
前回の一件で、テックスがチート野郎だというのは結構広まってしまったが、D研の存在はまだ知られていない。知られてしまえば、みんなが来たがって、俺の安住の地は奪われてしまうだろう。
ち、ちくしょうめぇ！　未来の安寧のために俺に働けと言うのか！
「わ、分かりましたよ。拠点については早急に対応します。だからそれまではD研ではなく、外で対処するよう、徹底してください」
ひとまず研修施設の着工はまだでも、窓口となる建物さえ建ててしまえば問題ない……が、面倒だなぁ。
そう思っていると、バルドーさんが悪魔の笑みを浮かべて答えた。
「分かりました。しかし、それも数日が限度ですよ」
数日で屋敷を完成させるのか……。　俺じゃなければ絶対に無理だろ！
心の中で愚痴を零した。けどふと冷静になると、拠点なら何度も作ってきたし、それほ

ど大変でもないかと考え直す。
しかしバルドーさんは甘くなかった！
「王宮との調整が出来ましたら本格的に研修施設の建設が始まりますので、その準備もお忘れなく」
正直、王都に研修施設を建設する、という現時点での目標は思い付きで呟いただけだった。
とはいえ、ここまで大事になってしまうと、いまさら面倒だから止めたいと言えるわけもない。
でも、今？　とは思ってしまう。
バルドーさんに異を唱えようとしたけど……いや、これ、どうせまた丸め込まれるやつだ。
王宮や冒険者ギルドなど、色々な方面から都合よく利用されている気もするが、前世では常に誰かに嫌われていたことを考えると、それよりはマシだと思ってしまう。なんだか、自分でも情けない。
面倒事を持ち込んでくるドロテアさんにすら好かれているという事実だけで、その被害を我慢して許してしまう。
バルドーさんに「明日から頑張ります」と言って、今日だけは見逃してもらった。
今日は穏やかに過ごせる最後の日。
明日からしばらくはバルドーさんにこき使われることになるのだろう。

第2話　ネグリジェ膝枕未遂事件

明日から忙しくなるなと憂鬱になりながら『どこでも自宅』のリビングへ。
少ししてみんなが揃ったので、食事をして、今。
食後のお茶を飲んでいたら、アンナが真剣な表情で話しかけてきた。
「テンマ様、少しお話があるのですが、お時間をいただけないでしょうか？」
おうふ、なんか危険な香りがするぅ。
今日だけはゆっくり過ごしたいのに、アンナは俺が拒絶することを許さない雰囲気だ。
「な、何かな？」
「ここで話すのはちょっと……」
「分かったよ。俺の部屋で話そうか？」

「はい！」
その嬉しそうな表情が、逆に恐ろしい……。
部屋にアンナを案内して、向かい合わせでソファに座る。
アンナは部屋に入ると、またしても深刻な表情になった。何か面倒事でもあるのかと不安になりながらも、アンナに尋ねる。
「話とは何かな？」
アンナは言い辛そうに話し始めた。
「先日の悪魔王事件の日のことを覚えていますか？」
え～と、悪魔王事件の日って何!?　いつの間にそんな名前がついたの!?
そんな突っ込みを口にしている場合ではないだろう。俺はアンナに答えた。
「もちろん覚えているよ。大変な一日だったからね」
「じ、事件が始まる前のことを覚えていますか？」
んっ、始まる前？　何かあったかな？
「え～と、そもそもどうやって事件が始まったんだっけ？」
「ジジちゃんが助けを求めてきたことが発端でした」
ああ、ジジが念話で助けを求めてきたんだ。
泊まっている宿『妖精の寝床』が闇ギルドの手の者に燃やされたのである。

「そうだったね。ジジが助けを求めて念話してきた。あのときは正直焦ったよねぇ」
あのときは驚いて、速攻でジジのところに行ったんだ。
うん、自分でも少しカッコ良かったと思うなぁ。
「テンマ様はあのとき、何をしていました？　いえ、何をしようとしてました？」
えっ、あのとき……。何かあったような……。
あっ、ああぁぁ！　ネグリジェ膝枕未遂事件！　迷宮入りさせておいてくれよ！
「お、覚えているよ。でも、緊急時だったから……仕方ないよね？」
「はい、仕方ありません！」
そうそう、俺が休みの日にはいつもジジが膝枕をしてくれるんだけど、あのとき、それを羨ましがったアンナが、膝枕をしようとしたんだよね。……ネグリジェを着て。
まあ、ひとまず納得しているようで良かったよ……。な、納得しているよね……？
な、なぜジト目で睨んでくるのかな……？
「あれから毎日、ジジちゃんが膝枕しています……」
そ、それは、色々あって癒されたいから……。
「そ、そうだねぇ～。そ、そんな気もするなぁ～」
「間違いありません！　それも一日に複数回する日もありました！」
うん、そんな気がするぅ。

「グスッ、それはあんまりじゃないですか！」
「ゴ、ゴメンねぇ～、膝枕といえばジジだから、ついジジに頼んじゃった。今度アンナにもお願いしようかなぁ～」
そう言うと、アンナは何やら三枚の木の板を取り出して渡してきた。板には何やら文字が書いてあるので、読んでみる。
『膝枕券　一枚につき一回、膝枕をしてもらわなければならない』
肩たたき券かよ！　お前は小学生か⁉
「な、なんで三枚も？」
「利息です！」
そんな利息あるわけないだろぉが！　涙目で訴えてこないでぇーーー！
「そ、そうだよね。でも、利息はそこで止めてくれるかな？」
「一回でも券を使っていただけないと停止出来ません。それが終われば、十日間は利息を停止します！」
どんな悪徳業者やねん！
いやいや、だからジト目は止めてください！
「じゃ、じゃあ、今からお願いしようかなぁ」
「本当ですか⁉　じゃあ準備しますね！」

待て待て待てぇーーーー！　なんでメイド服を脱ぎ始めるぅ！
「ア、アンナさん、なんで脱ぎ始めるのかな？」
「えっ、メイド服を脱げば膝枕用の格好になれるから……ですが？」
なんで準備しているんじゃーーー！
「アンナさん、膝枕はメイド服で大丈夫だよ？」
「いえ、私が前にいた世界では、膝枕は下着でするのがしきたりなんです！」
「本当に？」
「ほ、本当です。信じてくれないんですか⁉　グスッ」
おうふ、目が泳いだあとに嘘泣きですかぁ。アンナさんや、完全にドロテアさんに影響されたよね？
彼女は最初は貞操を守るために、やたらと反抗的な目をしていた。
警戒しないようになったのは嬉しいけど、エッチな下着を作るように頼んできたり、呪いの館を浄化するときも、なんか解呪の方法を色っぽく教えてきたり……。
出来ればそういうことは数年後にお願いしたい！
「アンナ式膝枕は膝枕券が十枚必要です！」
「そんなぁ～！」
「ダメです。この世界というか、俺のやり方と違うから十枚必要です！」

いやいや、ジト目で睨んでも、妥協出来ません！
それにそんな膝枕なら……マリアさんにお願いしたい！
マリアさんは、ドロテアさんの元パーティメンバーで人妻だが、異世界に来てから出会った中で一番大きな胸――優勝杯を持っている。それを下から眺めながら膝枕をしてもらえるなんて……最高だと思う！
「では、十枚貯めます！」
「いやいや、今から膝枕するのをアンナが断るなら、これ以降、利息の加算は認めません！」
「チッ」
あっ、ああぁ～、舌打ちしたよね！　絶対にしたよね！
なんかアンナが変わりすぎて恐ろしい。
それから何とかアンナを説得して膝枕をしてもらった。
早めにこの不良債権を償却しないと、俺の心臓が持たない。

◇　◇　◇　◇

翌日、昼頃に目を覚ました。
リビングに行くと、すぐにアンナが顔を出した。
「テンマ様、おはようございます。食事になさいますか？　お茶になさいますか？　膝枕になさいますか？」
真面目な顔で聞いてくるアンナに答える。
「おはよう。食事にしようかな」
「分かりました。準備するように厨房に伝えてきます」
アンナはすぐにリビングを出ていった。
気になる発言（膝枕）もあったが、アンナはメイドに徹していた。
昨晩の暴走が嘘のようだ。
『どこでも自宅』は静かだった。
他のみんなはすでに出かけたのだろう。従魔のシルバーウルフであるシルや、ピクシードラゴンのハルもいない。どこかに遊びに行ってしまったのかな。
昼まで寝ていたのは、テックスとしての作業は昼に出来ないことが多いからだ。
大っぴらに作業をしてしまえば、『テックス＝テンマ』だとバレてしまうからな。
もっとも拠点となる屋敷の建設は高い壁に囲まれたところで行うため、早くからやっても良いわけだけど……出来るだけ後回しにしたかったんです。ごめんなさい。
昼過ぎから日が暮れるまで王都の拠点の建設をし、夜には闇ギルドの拠点となっていた



場所の浄化作業がある。しばらくそんな生活が続くと思うと、悲しくなる。
「テンマ様、食事の準備が出来ました」
宿のオーナーであり、マリアさんの妹であるメアリさんがリビングに入ってきて、そう声を掛けてきた。
「ああ、じゃあ食堂に移動します」
食堂に移動するとジジとアンナが頭を下げて迎えてくれた。
「ジジ、おはよう」
「テンマ様、おはようございます」
ジジは挨拶をしてから、椅子を引いてくれた。すごく贅沢な状況だったが、もっと気軽に食事をしたい。
ジジは先日、宿が燃やされたときに気絶してしまったメアリさんに覆いかぶさり、彼女が煙を吸い込まないようにして命を救った。
それからメアリさんはジジを孫のように可愛がっている。そして、ついでに本格的なメイドの仕事を教え始めた。俺はそれほどジジやアンナに本格的なサービスを求めているわけではないので、少々息苦しい。
ただメアリさんが良かれと思ってやっているので、止めてくれとは言い辛い。
早く王都の拠点を造って、メアリさんにはそっちの仕事をお願いするか。どこでも自宅

はもう少し緩い感じが良い。
　食べながらアンナに尋ねる。
「みんなはもう出かけているの？」
「はい、バルガスさんと『狐の守り人』は朝早くからダンジョンへ、バルドーさんとピピは王宮へ行きました」
　バルガスはマリアさんの夫で、狐獣人の冒険者だ。そして狐の守り人は彼が面倒を見ている冒険者パーティである。ちなみにリーダーはミーシャが務めている。
　しかし、俺が気になったのはそっちではなかった。
「えっ、ピピも一緒に？」
「はい、なんでもピピに勉強を教えてくれる人がいて、その人に会わせると言ってました」
　確かに体を鍛える訓練ばかりしていたピピには、色々な知識も必要だと思う。しかし、バルドーさんの紹介と聞くと、少し不安になった。
　ピピが帰ってきたら確認しようかな？　でも聞くのが恐いなぁ。
「ドロテア様とマリアさんも王宮に行かれました。なんでも悪魔王関連で王妃様に呼ばれたとかで。あ、そうそう。エクレアさんも王宮に行っています。宮廷魔術師を取りまとめるので忙しいみたいです」
……くっ、それぞれ仕事しているとなると、ゆっくりしたいと言えないじゃないか！
　食事を終えると、俺は諦めて王都の拠点にする屋敷を造りに向かったのだった。

第3話　王宮の思惑

　バルドーは国王の執務室で国王と宰相に会っていた。
「バルドー、今日は珍しく普通に正面から来たらしいな？」
　国王がバルドーに尋ねる。
　元老院とのいざこざがあった際には、バレないよう窓などから王宮に侵入していたバルドー。
　事態が収束したとはいえ、慎重なバルドーがこうして普通に現れたことに驚いたのである。
「はい、今日は同行者がいたので、普通に訪問いたしました」
　バルドーが答えると宰相が楽しそうに話す。

「陛下、なんと獣人の子供と一緒に来たようでございます」
「なんと……まさかお前の子か？」
「いえいえ、私の弟子になります」
「待て、報告では十歳にも満たない子供だと聞いたぞ⁉」
宰相がバルドーの話を聞いて、驚いた声で尋ねた。
「はい、まだ八歳です。ですが、すでに大人に負けない実力があります。ただ、知識が追い付いていないので、カイナとアイナに教育をお願いしてきました」
「バルドー、あの二人に何を教えさせるのだ？」
「二人には私が教えたことを、同じように教えてくれと頼みました」
「……」
国王と宰相は驚きのあまり固まってしまった。
カイナとアイナはバルドーから諜報活動のすべてを叩き込まれている。
調略や暗殺、毒薬の調合など、普通では知ることの出来ない内容ばかりである。
「八歳の少女にそんなことを教えて、大丈夫なのか？」
国王が心配そうに尋ねる。
「彼女は間違いなく逸材です。彼女には私のすべてを教えようと思っています」
「それほどの逸材なら、将来は国のために働いてもらえないか？　教育に必要な援助は惜しまぬぞ！」
国王は真剣な表情でバルドーに頼んだ。
しかし、バルドーは首を横に振る。
「それは無理ですな」
「なぜじゃ？」
「テックス様が可愛がっているのです。私の一存では決められません」
国王と宰相はバルドーの返答に驚いた。
「テ、テックス殿は情報を得るために少女を育てることまで……」
宰相の呟きに、バルドーはまたしても首を横に振る。
「いえ、テックス様は彼女を家族のように可愛がっているだけですよ。実戦は危険なのでやらせたがらず、私も困っているくらいです」
「お、お前は、テックス殿を怒らせて大丈夫なのか？」
「ふむ、怒らせたら大変でしょうな。ですが、彼女が訓練を受けたり知識を学んだりすることに、それほど反対はされていません。怒るとすれば、彼女を傷つけるような相手に対してでしょうな。今回の悪魔王事件も彼女の姉が襲われたことが、すべての始まりでしたから」
バルドーは気軽に答えたが、それを聞いた国王と宰相の顔色が変わった。

「す、すぐに、その少女を警護するように指示を出せ！」
「はい、すぐに！」
国王の命令を聞いて、宰相が慌てて部屋を出ていく。
「ああ、そんな必要はないのに。カイナとアイナが一緒にいるのですよ？」
バルドーはそう念を押したが、国王は呆れたようにバルドーに言う。
「馬鹿な貴族や役人が少女に何かしたらどうする⁉」
「ははは、その場合は遠慮なく相手を殺すようにカイナ達に言ってありますから、大丈夫ですよ」
「大丈夫なものか！　カイナ達が貴族を殺せば大問題だ！」
「確かにそうですなぁ」
国王は疲れた表情でバルドーを睨みつけたが、バルドーが気にした様子はまったくなかった。
しばらくすると宰相が戻ってくる。そして国王に近衛騎士に指示してきたと報告した。
国王はそれを聞いて、表情を緩ませる。
「うむ、では本題だ。宰相、例の書類を頼む」
宰相が書類をテーブルに置いた。
そこにはテックスに関連するあらゆることが書いてある。

書類を見ながら宰相は言う。
「まず、今回、テックス様から元老院の会議場を壊した賠償としていただいた品についてですが、高価すぎます」
書類に記されている金額を示しながら説明する。
「こちらはオークションに出した場合の開始価格です。実際にはこの何倍もの値段が付く可能性があります」
「エリクサーなど国宝だぞ。そんなものに金額などつけられるものか！」
宰相の言葉に国王が補足した。
「ククク、相変わらずテックス様は面白いことをなさる。たぶん自分がきっかけで、ドロテア様が暴走したと考えたのでしょう。しかし、相変わらず物の価値を理解していませんねぇ」
笑っているバルドーに宰相が尋ねる。
「本当にその説明通りなら安心出来るのですが……。我々としては、『これほどの物を渡したのだから反抗するな』と脅されている気になるのだ。それは違うのだな？」
「さあ、どうでしょうか？　そんなことはないと思いますが、私にテックス様の真意は分かりませんから」
バルドーは惚けたように答えた。

「バルドー、そう苛めるでない！　私と宰相はテックス殿の真意が分からず、夜も眠れないのだぞ。貴族共や側室、それに他国からも問い合わせが来ている。頼むからテックス殿の真意を確認して教えてくれ！」

国王は縋るようにバルドーに頼み込んだ。

バルドーは最初に説明した通り、テンマはやりすぎたと反省して高価な物を渡したと思っている。そして国宝級のお宝に関してもあまりにも簡単に発見出来てしまったことで、それほどの価値があると気付いてないと推測していた。

ただ、それを確定させることに意味があることも確かだろうと結論付け、頷く。

「分かりました。テックス様に確認しておきましょう」

宰相がホッとした顔をする。

「それとドロテアが王妃に若返りポーションを贈ったそうだ。テックス殿が渡した物を、ドロテアが勝手にプレゼントしてしまった可能性もあるのではないかと心配しているのだ。そのことでテックス殿の怒りが王国に向いたら困る。それも問題ないか確認してくれないだろうか。……出来ればテックス殿が返却を希望しているように、やんわりと話を持っていってほしいのだが……」

最後の一言はとてもか細かった。

テンマは気にしないだろうと思いつつも、バルドーは国王がなぜ若返りポーションを返却したがっているのか疑問だった。

「確認はしますが……なぜポーションを返したいのですか？」

「……他の側室も欲しがって、困っているのだ。王妃が貰った物を王妃が使うのは当然のことだ。しかし、それによって妻達の関係性が悪化してほしくはないのだ……」

国王の話を聞いてバルドーも気の毒だと思ったが、断る。

「それは大変だと思いますが、テックス様にお願いすることは難しいと思います。テックス様とドロテア様間の関係がそれによって悪化する方が嫌ですので。それに、夫婦の問題を持ち込まれても困りますなぁ」

「そうか……」

バルドーの返事に国王は残念そうに俯いた。宰相も気の毒そうに国王を見ているが、それ以上は何も出来ない。

宰相は話題を変えるために話を戻す。

「元呪いの館の周辺の土地は、商業ギルド経由でテックス殿が買い取ったようだな？」

「ええ、呪いの館の跡地も含め、研修施設を建設する予定です」

「そうか。ならテックス殿から貰いすぎた賠償金でさらに周辺の区画を国が買い上げ、テックス殿に提供させてもらうとしよう」

「ほほう、それは大盤振る舞いですなぁ」

予想外の国王の提案にバルドーは疑いの目を向けた。テンマを飼い慣らそうとしているのではないかと思ったのである。

「そんな目で見ないでくれ。実は周辺の土地から人が逃げ出しておる。商業ギルドからも相談されて、安く買い上げる話がついたのだ」

バルドーは理由が分からずに戸惑う。

すでに呪いの館が浄化されたことは正式に告知されているのになぜなのか、と。

「呪いの館を浄化したことで悪魔王が生まれたという噂が立っているのだ。そして、あの周辺は呪いの館があったために普通の民は住もうとせず、そのせいで訳ありの連中が多く住み着いていたのだ。そんな場所に住みたいと思う奴がそう何人もいると思うか？」

宰相の説明にバルドーはなるほどと納得した。

「それにお願いもある。出来れば宮廷魔術師やその家族達に住まいを提供してほしい。今いる宮廷魔術師の大半がテックス殿の管理下に移るし、王都にいない宮廷魔術師が戻ってきても、ほとんどがテックス殿の管理下に入ることになるだろう。だから、王宮がそのために土地を提供したことにしてほしいのだ」

「ふむ、それは随分と王宮に都合の良い話ですねぇ」

バルドーは笑みを浮かべながら、嫌味を言った。

「その通りだが、これまで王宮の対応で辛い思いをさせた宮廷魔術師に、良い環境を提供したいという気持ちには偽りはないのだ」

国王は真剣な表情でそう口にした。

「とはいえ、もちろん元宮廷魔術師との関係を良好にしたいとの思惑はある。関係が悪いという噂が広まっては困るのも本音だ。かつてこの国のために働いてくれていたお主に改めて頼む。国のために、その方向で考えてくれないか？」

「分かりました。最終的にはテックス様の意向を聞いてからになりますが、その方向に進むように調整しましょう」

「助かる！」

宰相はバルドーにお礼を言い、国王はホッとした表情を見せる。

そしてバルドーはテンマにどう働いてもらうか、頭の中で計画し始めたのであった。

第4話　王都の拠点

王都のどの辺に拠点を造ろうかと考える。

慰霊碑と礼拝堂を建て、その周辺には色々な場所から木や植物を持ってきて植えた。それによって区画の三分の一が公園のようになっている。

その区画の最奥に、拠点を建てるか。

建物は木造の温泉宿風にしよう。それほど大きくするつもりはない。地下に大浴場を造り、一階はリビング、食堂、来客用の応接室、メアリ夫妻の部屋を作る。

そして二階にはドロテアさん、マリアさん、狐の守り人用と来客用の部屋を何部屋か用意する。そして二階の最奥の部屋にD研の入り口を設置しよう。

自分の部屋は作らない。どこでも自宅を利用すれば良いからな。ジジやピピ、それにアンナも、どこでも自宅で生活させよう。

今後はドロテアさんやミーシャ達は、基本的には許可なくD研に入れないようにする。どこでも自宅は自分が安らげる場所であるべきだからな。

最近は出入りが多くなりすぎている。

拠点さえ出来れば、D研に人を入れる必要はないはずだ。

ミーシャはしばらくは狐の守り人として活動するので、あえて入れる必要はないだろうという考えから。

ドロテアさんは言わずもがな、トラブルを持ち込んでくるのでなるべく関わりを減らしたいという意図だ。

マリアさんは許可したいが、そうなればドロテアさんが納得しないだろう。

エクレアさんはそれほど関係が深いわけではない。近日中に魔術師向けの建物や研修施設を造るのでそちらに部屋を用意する。

バルドーさんは拠点で会えば問題ないし、必要なら別の建物を用意しても良い。

反対に、どこでも自宅に泊まるメンバーは入れる理由があるのだ。

ジジやピピは一緒にいて癒されるから、むしろいてほしい。

アンナとは以前のような確執はなくなったけど、肉食系メイドにクラスチェンジしたのは困りものだ。ただ眷属である彼女を突き放すのは難しい。それこそ膝枕の件を思い出すと、これでどこでも自宅に入れなかったらかなりいじけそうだし。

拠点を作ったら研修施設にも着手しなきゃだよなぁ。

研修施設は魔術師用、冒険者用をそれぞれ用意する予定だ。魔術師用の施設はエクレアさんに、冒険者用はネフェルさんに管理してもらう。

そしてドロテアさんには魔術師用の研修担当に、マリアさんとバルガスには冒険者用の研修担当を務めてもらいたい。

バルガスは狐の守り人の世話をしているのを見る限り、意外に面倒見がよく、冒険者の仕事に精通している。思い込みが激しくてすぐ調子に乗るが、適任だろう。

……っていうかあれだな、幹部用の建物があっても良いか。

そんなことを考えてから、自分達の拠点を造り始めた。
結局その日のうちに地下の大浴場と拠点の建物まで完成させ、深夜に闇ギルドの拠点を一人で浄化しに行った。
ああ、やることがいっぱいだ……。

第5話　社畜とアーリンと王女

拠点作りに着工した日から、十日が経った。
昨日はD研に戻るのも面倒で、拠点の客室で寝てしまった。
最近、少し寒くなってきた。なんとなくこの国の気候は日本に似ているように感じる。
「……はぁ」
起き抜けに、思わず溜め息が零れた。
最初こそ王都に来るのを楽しみにしていたが、今は早く逃げ出したいとすら考え始めている。

闇ギルドの拠点を浄化した翌日に拠点が完成し、引っ越しも済んだ。
その翌日には幹部用の建物が完成した。エクレアさんとネフェルさんもそこに引っ越してきた。さらに翌日にはバルドーさん専用の裏組織用の建物も完成した。こちらはまだ具体的な使い方を決めていないので、三階をバルドーさん専用の執務室にしただけで、それ以外は未着手だ。
結構巻きでやったので、これで数日は余裕が出来たかと思ったが、そんなタイミングでバルドーさんが王宮との調整をちょうど終わらせてしまった。
それで本格的に研修施設の建設を始めることになってしまった。
二日後には魔術師と錬金術師の、その二日後には冒険者と兵士用の研修施設を建てた。
そしてその三日後には地下に訓練施設、地上部分には研修者用の宿舎を建てる。
これらは建物を造っただけで、内装や備品のほとんどは王都の職人や商人に発注した。
ちなみにエクレアさんやネフェルさん達をはじめとした女性陣からの要望で大浴場を数ヶ所造ったが、みんなからの評判は非常に良い。
王都は研修施設が出来たことで驚くほど活気づいて、景気が良くなっているようだ。
これでようやくゆっくり出来ると思っていたら、隣の区画を王宮から提供されたとバルドーさんに言われた。

元宮廷魔術師や研修施設で働く人やその家族の住居をそこに建ててほしい、とのこと。
まだしばらく社畜生活が続くと思うと、涙が零れそうになる。
辛いのはそれだけじゃない。目立たないように夕方から朝まで働いて昼まで寝る生活が続いているせいで、みんなと生活サイクルがずれてしまっている。
シルやピピと一緒に寝られないので、ストレスが溜まってしまうのだ。
ただ、あのドロテアさんですら忙しく働いているので、それを励みになんとか頑張っている。
落ち着いたら王都を出てゆっくりしたい。最近はそんなことばかり考えている。
今日は午後から教会に行って、あらゆる情報を登録したり特許申請したり出来る『知識の部屋』の設置をお願いする予定だ。どうすれば設置出来るのかは知らないが、アンナが出来そうなことを言っていたのでお任せしよう。
また、前回教会に行ったとき、この世界を創造した女神であるテラス様に会った。
毎回呼び出されるとは限らないけど……テラス様と会ったら、愚痴を零してしまいそうで怖い。
不満に脳内を苛まれ続けているのはよくない。頭を左右にぶんぶん振って、一階のリビングに下りていく。
足音に気が付いたのか、シルが近寄ってくる。

ふふふっ、愛い奴じゃ！
食事前にシルモフを堪能するのがここのところの日課になっている。シルと一緒にリビングに入ると、シルモフスペースに直行する。
そしていつものように、両目を瞑ってシルモフを堪能する。
最近はしばらくシルモフを堪能していると、少ししてからジジかアンナが食事の準備が出来たと呼びに来る。毎日同じ時間に起きるので、それに合わせてくれているようだ。
今日も誰にも邪魔されず至福の時間を過ごしていた。
「ちょっと！　その子は私がモフッていたのよ。勝手に取らないで！」
んっ、至福の時間を邪魔したのは誰だ!?
シルモフをしながら片目を開けて確認すると、見たことのない美少女がなぜか怒ってこっちを見ている。
俺は返事するのも面倒で、無視することに決めた。
「ふふふっ、シルのモフモフは最高だぁ～！」
思わず呟いてしまう。
「いい加減にしなさい！　私の話が聞こえないの！」
「ほれ、ここか？　ここが気持ち良いのか？」
シルの首筋を撫でながら、感触を楽しむ。

「キィーーー！　あなた、私にこんな無礼なことをして、どうなるか分かっているの⁉」
そんなこと知るか！　至福の時間を邪魔するんじゃない！
「ジジ、ジジはいないの⁉」
なんだと⁉　なんでこいつがジジを呼び捨てにしているんだ！
「はい、お呼びになりましたか？　あっ、テンマ様、おはようございます」
「おは――」
「ジジ、この無礼者が失礼なことをしてきたの。すぐにドロテア様に伝えてちょうだい！」
ジジに声を掛けようとしたのに、邪魔をしやがった！
それにジジに当然のように命令するのが納得出来ない。
べ、別にジジを取られたような気がして腹を立てたのではない……たぶん。
「えっ、あの、でも……」
「使えない子ね、アンナ、アンナはいないの⁉」
あ、こいつ！　ジジを侮辱しやがった！
ジジが涙目になっている。また、どす黒い何かが溢れてきそうだ……！
「お呼びでしょうか？　あっ、テンマ様、おはようございます！」
「何を悠長に挨拶しているの！　こいつが無礼を働いたのよ。すぐにドロテア様に伝えてちょうだい！」

立ち読みサンプル
はここまで

ヤバい！　抑えきれそうにない！
「黙りなさい！　無礼なのはあなたでしょう！」
あれ、アンナが先にキレた⁉
「えっ、何を……？　メイドが私に……⁉」
美少女が混乱している。ジジも驚いている⁉　俺も驚いている！
「テンマ様、この女はすぐに放り出しますので、食事にされてはどうでしょうか？」
え～と、どうしよう……。
アンナが先に怒ったことで、どす黒い何かが引っ込んじゃった……。
「あぁ～、テンマせんせぇ～！」
懐かしい声が、リビングに響いた。
俺のことを先生と呼ぶのは一人しかいない。
「アーリンか、久し――」
「アーリンさん、この無礼者を知っているの？」
俺の話をぶった切り、美少女がアーリンに話しかける。
また、どす黒い何かが……。
「無礼者はあなたです！」
うん、俺のどす黒い何かは引っ込んだ！